

## 学習成果を活かす機会の構築について②

### 1. 前回の概要

#### (1) 目指す方向性

「学びに出会う機会の充実」と「学んだ成果を活かす機会の充実」を生涯学習の両輪と捉え、「学び」の効能を世の中に周知するためにも、今後、「学んだ成果を活かす機会の充実」に力を入れていく必要がある。

#### (2) 「学んだ成果を活かす機会」を充実するための課題

##### ① 学習成果の測定・評価

市民の学習成果の測定・評価は行われてこなかった経緯と「活かす機会」を充実する際に求められる「知識」や「指導力」などの客観的評価。

##### ② 学習成果を活かす場の確保

他部署、他機関との連携の難しさ。

##### ③ 学習期間の長期化

初級から、地域での活躍まで念頭に置くことによる講座や修了後の支援期間の長期化の問題と、対象者の絞り込みの問題。

##### ④ 支援の多様化、支援期間の長期化

最終的に団体としての自立(一般団体化)を目標とする生涯学習センターと、支援の長期化、永続化を求める団体側との相違。特定団体への支援の長期化が既得権化するリスク。

#### (3) 第1回の協議テーマ・意見

##### 《テーマ》

① 町田市生涯学習センターは、「学習成果を活かす機会の充実」にどの程度取り組んでいくべきか

② 「学習成果を活かす機会の充実」に取り組むうえで、力を入れていくべき分野はどこか

㊦ 「個人的活用」型(個人のキャリアアップ、自己の生活課題解決)

㊧ 「仲間づくり」型(仲間づくり、絆、市民どうしの学び合い)

㊨ 「地域課題解決」型(ボランティア活動、地域づくり活動)

㊩ 「活用の場の提供」型(人材バンク、関係団体支援)

##### 《意見》

▶ 生涯学習センターで学び、現在独立して活動している団体の代表的な事例として、「らぶふあみ」がある。もともと家庭教育支援学級の受講者の集まりから始まり、受

講後、町田市内の子育て情報を共有する団体を立ち上げた。企業からの協賛を受け、年4回、冊子を1万6000部発行し、幼稚園、保育園、子ども施設、駅、商業施設などで無料で配布している。現在は、任意団体から会社の所属となったが、活動は継続している。協力してくれる団体や企業があれば、一緒に、学んだことから成果を出していく仕組みができるといいのではないかと。団体としても、何かできることがあるれば、ぜひ協力したいと思う。

- ▶「らぶふあみ」のような成功事例は興味深い。スタートから現在に至るまでの経緯を周知していくべきだと思う。
- ▶「学習成果を活かす機会の充実」については、これまで以上に重点的に進めてほしい。生涯学習センター内だけでなく、既に地域で活動している団体との橋渡しを進め、そこで活動できるつながりを作ることが重要だと思う。
- ▶私はシニア向けのスマートフォン指導を生業とし、ボランティアでも行っているが、生涯学習センターのスマートフォン無料相談と民間のサービスが重複している点については懸念も感じている。一方で、生涯学習センターでは、個人のスキルを育成し、個人が地域の人々に教える循環を目指している。例えば地域課題の解決に直結する人材育成やオンラインでサポートできる人材の育成は、個人や民間の教室では難しいので、こうした分野で公的機関が果たす役割は非常に大切だと思う。デジタルデバイドの解消は広範な社会課題であり、個人では対応しきれないため、皆で力を合わせて取り組む必要がある。公的機関や地域団体と協力して進めていければと考えている。
- ▶今日の協議テーマは非常に関心があるが、ただ、一つの正解を見つけるのは難しいと感じている。どの分野にどの程度取り組むべきかについては、全てが大切であり、どれか一つを選ぶのは難しいというのが正直な感想である。生涯学習センターが得意とする分野や、重点を置くべきと考えているところを基に、他の組織や個人と協力しながら進めていくことが重要ではないか。
- ▶例えば「らぶふあみ」やまちチャレなどの団体にヒアリングを行って、その活動が発展した経緯や生涯学習センターの関りが有効であった点を確認するのも、生涯学習センターが力を入れるべき分野を確認する上では有効だと思う。
- ▶②の㉠～㉤は、一つの団体や個人で考えると、全ての要素が関連し合っていると感じている。例えば、個人のスキルが活かされているからこそ、仲間と一緒に楽しく活動を続けられることや、地域の課題解決に貢献している実感があるからこそ、継続して活動できるのだというものもあると思う。生涯学習センター全体でどう役割分担するかを考えることが重要かもしれないし、町田市全体、あるいは社会全体での役割分担を考える必要があるかもしれない。まだ答えが出ていないので、今回の問いを通じて、これから2回皆さんと一緒に考えていきたい。
- ▶生涯学習センターで学習していなくても、現役時代のキャリアや自分で学んだことを活かせる方が世の中にはたくさんいらっしゃいます。その中には、自分の知識や経験を何とか活かしたいと思っている方も多いのですが、具体的にどうすればいいかわからず、持て余している方もいると思う。こうした中で、生涯学習センターが「まちチャレ」を始めたことはとても意義深いと思う。市民が自らテーマを見つけて講座を作り、それをみなさんに届けるという活動を行っていることは、とても面白い事業だと思うし、市民が自主的に関与していくことに大きな意義を感じている。

- ▶市民大学でも、市民が自らテーマを見つけて、それを他の市民に伝えたり、提供したりする活動を取り入れていけたら素晴らしい。市民大学は学びの場であることが基本だが、自分のために学んだことを他の人に提供することができるようになれば、自然なステップアップにつながると考えられ、そのような機会を取り入れることは非常に重要だと思う。
- ▶学習成果の活用類型②㉠～㉡は順番に進んでいくプロセスとして捉えられているように感じた。特に仲間づくりについては、公民館から始まる活動であることが重要なポイントであると感じた。講座の中で、意見交換やワークショップを通じて、組織化を目的とせず、意見交換から問題意識を共有することができればいい。問題意識の共有が、新しい活動や組織が自然に発展していくことが理想だと思う。
- ▶自己表現や自己実現が生涯学習の基盤であり、特にシニア層のニーズが今後ますます増えていくと思う。生涯学習は、義務教育から社会人、そしてシニアに至るまでの延長線上にあるべきだと考えており、その理想的な姿と現実のニーズとのギャップを埋めることが課題だと思う。
- ▶仲間づくりについて、年齢を超えた絆やネットワークがどのように形成されるかは常に悩んでいる。これを解決するためには、皆さんと一緒に考え続けることが大切だと思う。生涯学習のあり方やニーズを考える中で、仲間づくりが重要なキーワードであると改めて感じた。
- ▶仲間づくりとは、ただ寄り添うものではなく、仲間になるためには、一つの共通のテーマが必要だと思う。何か共通の目的や課題があるからこそ仲間になるわけで、ディスカッションを通じてニーズや市民の課題が明らかになり、それをどう解決するかを話し合うプロセスが最も効果的だと思う。このような進め方ができる講座の構築が大切だ。
- ▶学習成果を活かす機会の充実において、「仲間づくり」が一番重要な点だと考えている。自分の好きなことを学び、それを他者に広めることが、学習成果を活かす一番のメリットだと思う。ただ、好きだからといって一人でそれを推進するのは難しい面もあり、仲間を募り、一緒に取り組むことが、学習成果を活かす機会を作る上で非常に大切だと感じている。みんなで協力して活動することは、新たな可能性を広げる良い機会になると思う。
- ▶かつて「公民館がなくなることで困る人がいるのか」という議論が盛んに行われていた。町田市の人口 42 万人のうち、どれだけの人が困るのかという数の理論で進められてしまう面もあった。運営協議会のような場では、生涯学習・社会教育を理解したうえで集まっているため、このような議論も可能だが、全く異なる場所で生涯学習や地域のことを話すと、相手にされないことも少なくない。こうした関心のない層に、どうアピールするかも重要である。やるべきことをはっきりと見据えないと、結論がぼやけてしまうし、そのためには現時点でのニーズをしっかり把握することも重要である。
- ▶最近、大学生と言葉を交わすと、文化の変化を敏感に感じることもある。この場の年齢層は比較的高めで、今の社会の感覚とは異なる可能性もある。こうした点も考慮し、どの時代のどの世代でも理解されるような議論にすることが大切だと思う。
- ▶もともと生涯学習センターは公民館としての役割を持っており、公民館は、一人で学ぶというよりも、共に学び合うことを重視して事業を行ってきた経緯がある。豊かな

学び合いを作り出すことを意識しつつ、ここで学んでいる人たちが一人一人自分の学習の主人公となり、例えば講座が終わった後も自主的な活動を継続することを、担当している職員の皆さんも期待して講座を作ってきたのではないか。自主グループやサークルを作っていくことを強制することはできないが、グループ化することを意識しながら事業に関わり、丁寧に関係性を築いてきたのではないか。

### 《第1回の議事まとめ》

事例として出た「らぶふぁみ」に対する評価が高く、モデルケースとして掘り下げ、検証していくべきとの意見が多くありました。

テーマとした①「学習成果を活かす機会の充実」への取り組みについては、これまで以上に取り組んでいくべきという意見が中心でした。②の「力を入れていくべき分野」については、㊦～㊩は連続したもので、どれか一つを選択できるものではないという意見が支配的でしたが、公民館時代から取り組んできた㊧「仲間づくり」や「絆の構築」を評価する意見が多くありました。一方で、民間と棲み分けや、生涯学習に興味のない層や若者層にも理解できる議論を行い、日頃生涯学習に接していない層へのアピールしていくことの重要性についての意見もいただきました。

## 2. 第2回の対象事業「学んだ成果を活かす機会を拡充するための事業」

現在、生涯学習センターで実施している「学んだ成果を活かす機会を拡充するための事業」に大きく分けて、①市民大学に代表される、学習と学習成果の還元を一体化した事業②生涯学習ボランティアバンクに代表される学習成果の還元の特化した事業(生涯学習センターでの学習を伴わない)ものに大別されます。

今回は、「学んだ成果を活かす機会」に集中して議論いただくため、②の事業事例を紹介します。

### (1)生涯学習ボランティアバンク

#### ①事業概要

市民の知識・経験を地域の中で活かし、伝える「知の循環」の仕組みを構築し、市民同士の「学び合い」の輪を広げることを目的に実施している人材バンク制度。登録者は、「知識・経験・技術を持ち、町田市内で指導、支援ができる個人・団体」。利用者は、「市内在住・在勤・在学の方が過半数を占める3名以上の団体」。

#### 生涯学習ボランティアバンクの登録件数、利用件数の推移

年度	2024	2023	2022	2021	2020	2019
登録件数	73件	88件	92件	108件	137件	136件
利用件数	4件	7件	4件	8件	3件	19件

新型コロナの流行以降、利用件数、登録件数ともに減少しており、2023年度には、利用件数、登録件数向上のため、市内で青少年向けのものづくり指導者養成を行っている(社)ものづくり文化振興協会と連携。同協会の養成講座修了生の登録を開始。併せて、従来、原則として市民グループに限定されていた利用者について

て、市内他部署、幼保、学童保育クラブ等の子ども団体、福祉団体等一部法人を対象に入れる形に緩和したが、未だ目に見えた効果は上がっていない。

## ②課題

- ▶設立以来、20件前後の利用件数で推移してきたが、新型コロナの流行以降、利用件数が減少している。利用件数の減少に伴い、登録件数も減少傾向にある。
- ▶申請してきた方を講師として登録しており、活動実績や資格の有無等は把握しているものの、講師の技量についての客観的な評価が不十分との批判がある。

## (2)事業へのボランティア参加

主催事業の中には、ボランティアに参加、協力いただいている事業が少なからずあるが、講座の修了者が先達的な立ち位置で参加するパターンが多く、指導者的な立ち位置で外部からボランティアが参加している事業は多くはない。

後者の代表的な事例としては、障がい者青年学級の「担当者」やまなびテラスの「支援者」といったものがある。

### ①青年学級担当者、まなびテラス支援者制度の概要

#### ア「担当者」制度の概要

障がい者青年学級開設時から導入された制度で、市職員の補佐的立場のボランティアではなく、障がい者教育の専門家を招聘し、支援してもらうというコンセプトで制度設計されている。開設時の1970年代は、まだ有償ボランティアという考え方もない時代だったが、専門家として謝礼を支払い、専門性を高めるための学習の場として担当者会議や研修の機会を用意する形態は、当時は革新的な形態だった。

#### 2024年度障がい者青年学級 学級生数・担当者数

	公民館学級	ひかり学級	土曜学級
学級生数	52人	36人	38人
担当者数	22人	14人	10人

#### イ「支援者制度」の概要

「学習支援事業 まなびテラス」は、日常生活に必要な読み書き、計算、義務教育レベルの学力を身につけることを目的とした、いわゆる自主夜間中学。学習者の要望に合わせ、基本的にマンツーマンで支援しており、支援にあたっているボランティアを「支援者」と称している。「支援者」は「担当者」と異なり、無償のボランティアとして活動している。

#### 2024年度まなびテラス開催数・参加者数

開催回数	延参加者数	延支援者数
21回	136人	154人

## ②「学んだ成果を活かす機会」として捉えた場合の課題

- ▶いずれも、マンツーマンないし、それに近い比率で指導者を必要とする事業でボランティアの協力を仰いでいるが、条件面での問題もあり、新規参加者が少なく、メン

バーが固定化、長期化している。

- ▶メンバーが固定化、長期化することで、メンバーの専門性が向上する効果がある一方、現状維持バイアスが働き、事業が硬直化することもある。
- ▶メンバーの増員を図る際、数を優先すると専門性が低下することもあり、結果として講座の質自体が低下する可能性もある。

### 3. 「学びに出会う機会と学習成果を活かす機会」に関するアンケート結果(資料2-2)

- ▶今後の学習方法として、書籍、テレビ、インターネット等による自習、対面・オンラインでの講座参加の意向が高い。
- ▶学習成果は、趣味やキャリア形成など個人活動に活かしているケースが多く、地域活動、市民活動で活かしているケースは少ない。今後、活かしたい分野においても個人活動のニーズが高い。
- ▶上記の傾向にも関わらず、「生涯学習ボランティアバンク」制度については、80%弱の方が興味を持っており、内訳としては利用者としての興味の方が高い。

## 4. 第2回のテーマ

### ①生涯学習ボランティアバンクの必要性と改善点

利用件数や学習成果を活かす機会に関するアンケート結果から見ると「市民の知識・経験を地域の中で活かし、伝える」という生涯学習ボランティアバンクのコンセプトは、市民ニーズと乖離しているとも考えることもできる一方で、同アンケートでは8割弱の方が興味を持っているとの結果も出ている。

他市でも類似事業が行われているが、いずれも利用率は低調であり、今後、継続していくべきか検討の必要がある。また、継続にあたっては、このまま継続するのではなく、利用率向上のためのなんらかの改善が必要ではないか。

### ②「担当者」「支援者」型ボランティア導入の方向性

現在、一定数の指導者を必要とする事業についてボランティアを導入しているが、人数集めや質の維持など課題もある。こうした事業へのボランティア導入について、今後、学習成果を活かす機会の拡充の観点から積極的に拡充していくべきか。または、講座の内容により、必要な講座のみ導入していく程度で十分か。また、今後も継続していく際、課題解決のためにどういった改善が考えられるか。